

2010年(平成22年) 2月21日発行

発行/名張市企画財政部広報対話室 〒518-0492 名張市鴻之台1-1

☎0595-63-7402 ㊚64-2560 ㊼info@city.nabari.mie.jp

🌐http://www.city.nabari.lg.jp

携帯版📱http://www.city.nabari.lg.jp/m_index.htm

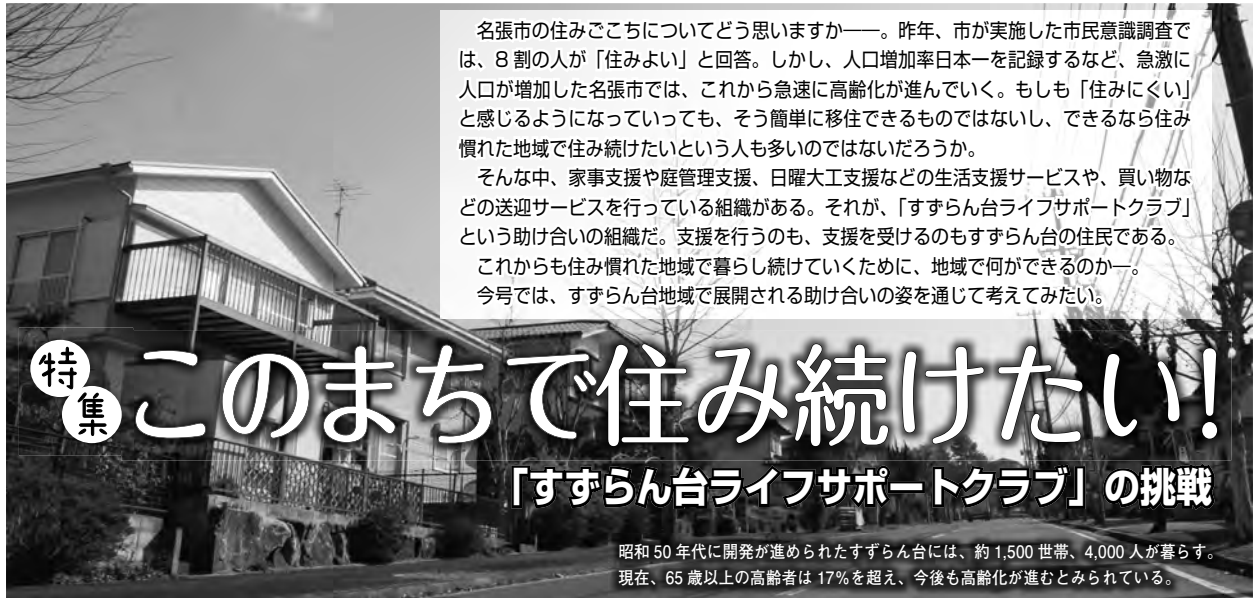
バーコード読み取り対応の携帯電話端末から携帯版📱へ



▶ 主な内容

P1~3...特集 このまちで住み続けたい!

P4...なぜがたりなばり講演会・年金通信



名張市の住みごちについてどう思いますか——。昨年、市が実施した市民意識調査では、8割の人が「住みよい」と回答。しかし、人口増加率日本一を記録するなど、急速に人口が増加した名張市では、これから急速に高齢化が進んでいく。もしも「住みにくい」と感じるようになっていっても、そう簡単に移住できるものではないし、できるなら住み慣れた地域で住み続けたいという人も多いのではないだろうか。

そんな中、家事支援や庭管理支援、日曜大工支援などの生活支援サービスや、買い物などの送迎サービスを行っている組織がある。それが、「すずらん台ライフサポートクラブ」という助け合いの組織だ。支援を行うのも、支援を受けるのもすずらん台の住民である。

これからも住み慣れた地域で暮らし続けていくために、地域で何ができるのか。

今号では、すずらん台地域で展開される助け合いの姿を通じて考えてみたい。

特集

このまちで住み続けたい!

「すずらん台ライフサポートクラブ」の挑戦

昭和50年代に開発が進められたすずらん台には、約1,500世帯、4,000人が暮らす。現在、65歳以上の高齢者は17%を超え、今後も高齢化が進むとみられている。

Chapter 1 家事、庭管理、日曜大工、送迎... 身近な暮らしの困りごとを、地域で解決!

掃除や洗濯、庭木の剪定、家具の移動、電球の交換、買い物や通院...。高齢となり、昔は何でもなかったことでも、難しくなってしまうことがある。

そんな暮らしの中の困りごとを、地域の助け合いで解決しようと活動しているのが、「すずらん台ライフサポートクラブ」(以下ライフサポートクラブ)だ。会長の大橋健さんは話す。「入居当初は小さかった庭木も、驚くほど成長しています。時が経つのは早いものですね。子どもが独立して家を離れ、夫婦2人、または一人暮らしの生活を迎える時、家の維持管理も大きな課題となっていくのです」。

「一枚だけでも網戸の交換を頼めるのだろうか」「換気扇の掃除が大変だと感じている」「吹き抜けの天井の電球を換えたいが、難しくなった」「家の庭の草木がジャングルのように生い茂ってしまつて手がつけれない」...。ライフサポートクラブには、月に平均5~6件、多いときには10件以上の依頼が寄せられ、支援ができる会員が依頼した会員宅へ向かう。「暮らしの中のちょっとした困りごとは、高齢になると増えますが、業者に頼むほどではなかったりもします。そんなときに気軽に頼ってほしいのが、地域の仲間だと思ふんです」と大橋さん。

◆ ◆ ◆
家事や庭の手入れなどが単にサービスとして提供されるのではない。基本は、生活を支援する住民(活動会員)とサービスを利用する住民(利用会員)が、できるだけ一緒に作業すること。そこに、住民同士の交流が生まれている。

掃除や洗濯などを依頼した利用会員の菅野美代子さん(写真中央)は「家事をこなしたいけれど、足が不自由だし、火を使ったりするのも危なく感じてきたので、とても助かっています。地域の人と会うのも楽しみです」と喜んでいう。活動会員の橋本博子さん(写

心から喜んでいただけるので、
生きがいにもつながってる!
だから「お互いさま」ですよね。



真右)と佐野光子さん(写真左)は、「心から喜んでいただくと、自分が必要とされているんだなど実感。これが、生きがいにもつながっているのだと思います。だから、お互いさまです。それに、将来は、わたしたちもこの制度を利用するかもしれないので、元気なうちはお手伝いしたい」と口をそろえた。

◆ ◆ ◆
家事などを支援するサービスのほかにも、すずらん台からスパーや病院などへの送迎サービスを実施。会員からは、「家に閉じこもりがちだったが、外出のきっかけとなった」「運転免許証を返納する踏ん切りがついた」「車内のおしゃべりも楽しみ」といった声も寄せられている。また、運転手が手荷物を運ぶといった細かい配慮も人気を呼んでいる。

【2ページへ続く】



特集

このまちで住み続けたい!

「すずらん台ライフサポートクラブ」の挑戦



chapter 2

地域課題を洗い出したことが活動の原点。とにかく動き出して、ダメなところは見直せばいい。

すずらん台町づくり協議会で「地域福祉活動計画」を策定する際、「まずは、地域の課題を洗い出そう」と、さまざまな議論がなされた。平成15年のことだった。その翌年には、地域住民へのアンケートも実施された。

そんな中、「交通弱者への支援が不可欠」という結論に至り、送迎サービスを開始するための資金を積み立てていくことから始めていった。

日常生活に不可欠なのが買い物だが、すずらん台には店が少ない。移動を手助けしてくれた若者が独立していく家庭も増えてきた。また、路線バスがあっても、丘陵地

に造成された住宅地特有の坂が高齢者の移動を困難にしていた。もちろん、移動にかかわる支援だけでなく、家事や家の維持管理など暮らしの中でさまざまな支援を必要とする高齢者も増えていた。

「当時の議論と、これに続く地域の皆さんの取組みが、現在のライフサポートクラブの基盤となっています。しっかりとした将来ビジョンを持って準備しておいてよかったです」と、当時を知るライフサポートクラブ事務局長の濱川るりさんは振り返る。

◆ ◆ ◆

平成20年4月、すずらん台の地域課題を解決していくために、ラ

イフサポートクラブが活動を開始。会員制の助け合い組織として、会員の年会費のほか、市の補助金や市民活動保険を活用することなどにより、生活支援サービスや送迎サービスを実施していくことになった。サービスを提供する活動会員が集まるかが鍵となったが、地域のボランティア団体で組織する「すずらん台ボランティア連絡会」が協力。たくさんさんの活動会員が集まった。

◆ ◆ ◆

現在、活動会員は48人が登録。利用会員は、サービス内容や利用者の声などを掲載した機関紙の発行のほか、まちの保健室による紹介、口コミなどにより、今年1月に、100人を突破した。

◆ ◆ ◆

ライフサポートクラブが活動を開始してまだ2年ほど。それなのに既にさまざまな事業が展開されているのは、事前に地域ぐるみで

地域の課題について議論されていたことや、もともと地域に存在していた組織が連携しあえたこと。そして、行政に比べ、フットワークが軽い、というところにも理由があるようだ。

「問題が出たときにどうすればいいかばかりを考えていても前に進みません。まずは動き出して、ダメなところは見直していきけばいいし、やってみないと見えてこない課題もある」と大橋さんは指摘する。特に、送迎サービスは、

資金の調達をはじめ、運行ルートや時刻、事故への対処方法など課題は多い。「目的は、地域住民みんながいくつになっても、すずらん台で暮らせる環境づくり。何かするとなったら、すぐに人が集まってくるのがすずらん台のいいところかな。わたし自身も、地域の皆さんに『一人でも安心して住める町になってきた』と喜んでいただくと、やっつけてよかったと思えます」と笑顔を見せてくれた。



「とにかく動き出すことが大切」とすずらん台ライフサポートクラブ会長の大橋健さん。すずらん台市民センター内にある事務所

＜ライフサポートクラブのサービス概要＞



生活支援サービス

生活に密着したきめ細やかな生活支援サービスとして、①家事支援サービス（掃除、調理、洗濯、買い物など）②庭管理支援サービス（剪定、草引き、草刈りなど）③日曜大工支援サービス（手すり取付、家具固定、網戸張替え、障子張替えなど）がある。利用日より3日前の午後5時までにライフサポートクラブ事務局（すずらん台市民センター内）へ申し込む。

利用料は、材料費などのほかに、作業費として、1時間まで1人700円、以降30分毎に500円を加算。交通費としてガソリン代1kmあたり50円。活動会員には、協力謝礼金として、1時間までは交通費として1回500円。1時間以上は、交通費・弁当代として1回1,000円が支払われる。なお、家に入るときは2人以上で支援を行っている。

送迎サービス



7人乗りのワゴン車で現在3つのルートを運行している。

①病院コース…すずらん台～寺田病院・市立病院 ②買い物コース…すずらん台～コメリ・ロコマート、Aコープ、青山町駅 ③ナッキー号接続コース…すずらん台～アビタなど

運行時間は、平日の午前9時～午後3時。利用するには、前日の午後5時までにライフサポートクラブ事務局に申し込む。会員は、ガソリン代相当分を負担する。現在、運転者として8人が登録。月単位で乗務計画を作成している。

なお、送迎サービスを実施しない日は、すずらん台内の各種団体に貸し出しているほか、市民センターまつりの際には、来館者の送迎に活躍している。



chapter3

「自分たちのまちは、自分たちでつくる」という 気持ちを、地域の人々まで共有することが大切 継続して活動していけるか。



経験豊富で時間的ゆとりもある団塊世代の活躍は地域社会で期待されている。活動会員として、また、送迎サービスの担い手として活躍中の古川武志さん(写真左)もその一人だ。以前は、電気関係の仕事をしていたので、ちょっとした家電修理もお手のもの。仕事を辞める前は、「仕事一本」の生活だったという。「運転中、地域の人が手を振ってくれたりすると、地域との一体感を感じますね。皆さん喜んでくれますのでやりがいもあるし、なにより楽しいです」と古川さん。写真中央は、運転手のリーダーである後藤友治さん。古川さんが運転手となったのは最近なので、この日同行した。写真右は買い物に行くために利用した小田ふみ子さん。

ライフサポートクラブでは、利用会員に「完璧を求めないでください」と説明している。家事や庭管理などは、あくまでも「お手伝い」であり、活動会員はできる範囲で活動しているからだ。また、活動会員は、地域のほかの活動にも参加していることも多く、利用者の希望の時間に合わせられないこともあるという。

一方で、「利用会員に喜ばれることで、技能を磨いていこうという気持ちに結びつけていただいているようです」と大橋さん。また、技術を持つ会員と、これから技術を身につけようとしている会員と一緒に作業を行うことで、多くの活動会員にさまざまな技術を習得してもらい、利用者のニーズに応えようとしている。

各地域で策定が進められています 10年、20年先の「地域ビジョン」

市内では、すずらん台ライフサポートクラブのように、行政だけでなく、さまざまな人や団体が地域課題に向き合いながら、多様な公共サービスを生み出し始めています(市では、このような支え合いの仕組みを「新しい公」と呼んでいます)。

そうした中、各地域づくり組織には、「地域づくり組織条例」に基づき、自分たちの住むまちの将来像を「地域ビジョン」としてまとめている地域があります。これは、10年、20年先の地域のあり方を、地域の実情に照らし合わせて、地域の人々に考えていただくというものです。市では、「新しい公」を進めていくためにも、市の各種計画や施策に、各地域の「地域ビジョン」を反映させていきます。

ただ、「地域ビジョン」は、地域の一部の人だけで作るものではありません。そのため、住民アンケートや住民の意見交換会などにより、多くの住民の意見を地域ビジョンに反映させようとして取り組んでいる地域もあります。

これからも「住み続けたい」まちであるために、皆さんの地域には、どんな課題がありますか？また、どんな取組ができるでしょうか？多くの地域皆さんがこの議論の輪に加わることで、もっと暮らしやすいまちをつくることにつながっていくはず。

※「地域ビジョン」について詳しくは、各地域の地域づくり組織(事務所は各地区の公民館や市民センターにあります)か、地域政策室(☎63-2186)へお問い合わせください。

を増やすことが大切だと思うんです。そのためには、多くの地域の皆さんに、会員登録していただけるようにしていかなければなりません。今後も、地域のさまざまな団体と連携して取り組んでいきたい」と話してくれた。毎月開かれる運営委員会には、町づくり協議会や老人会、市民センター、民生児童委員、地区社協、そして活動会員などから委員が集まり、実績報告や課題について話し合っている。そんな中、昨年12月からは、個人や団体(企業など)に活動を応援してもらうための「賛助会員」を募っていくことになった。

